
二人の孫

シキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の孫

【Nコード】

N0811V

【作者名】

シキ

【あらすじ】

ぬらりひよんの孫である奴良リクオには、義妹がいた。

その名は、奴良 莉音。

登場人物（オリジナルキャラクター）（前書き）

お気に入り登録を下さった方には申し訳ないのですが、
続きが思いつかず、勝手ながら変更させていただきました。

登場人物（オリジナルキャラクター）

奴良 莉音・・リクオの義妹。赤子の時に捨てられた莉音を、ぬらりひょんが拾って育てた。リクオと同じく、屋敷の妖怪やぬらりひょんに可愛がられている。

一人称はあたしで、怒ると敬語になる。

妖怪の時は私になり、性格は普段（人間の時）と変わらず口調は古臭くさる。

（人間の時）身長156・2cm↓（妖怪の時）身長170cm。

瞳の色、形はリクオと同じで、腰まで長い茶髪のを一つに結んでいる。（人間の時）

妖怪に変化すると、瞳はエメラルドグリーンに変わり、切れ長になる。髪は銀色に変わるが、長さは変わらない。翡翠色の着物を着て草履を履き、左手は包帯で巻かれている。化け猫屋に寄る時は必ず面をつける。

登場人物（オリジナルキャラクター）（後書き）

妖怪について詳しくないので、存在しない種類になると思います。
すみません。

1 魑魅魍魎の主となれ

朝の7時半、少年の声が屋敷に響き渡る。

「莉音、起きて！学校に遅刻しちゃうよ！！」

奴良リクオは、布団の中にうずくまる義妹の莉音を揺する。しかし、唸るだけで、一向に起き上がる気配がない。リクオは幼い頃から彼女と暮らしているため、寝起きが悪い彼女を起こす唯一の方法を知ってはいるが、本音を言うともあまりやりたくない。

昔、屋敷の妖怪にその手を使って起こしてもらったことがあるが、それ以来、その妖怪は彼女を見ると逃げ出すのだ。

自分も幼い頃は屋敷で共に暮らす妖怪（祖父のぬらりひょんを除いて）に、ほぼ毎日悪戯をしたので人のことは言えないが、莉音の方が酷かった。彼女は妖怪をいびり負かし、（組の妖怪関係なく）自分の家来にしていた。ちなみに、今現在も続いている。そして、自分の言うことを聞かないものは問答無用でばこぼこにするのだ。しかも、リクオでも止めることができないのが厄介なところである。時間は刻々と過ぎてゆき、莉音が気持ちよさそうに寝る側で、どうすればこちらに被害がなく、かつ安全に起こせるか考えていると、莉音の制服を持った雪女が部屋に入ってきた。

・・・ハンガーが凍ってしまっているが、雪女なので致し方ない。

「若ー、姫ー！・・・って、まだ起きてないんですか？！」

雪女は、布団の中ですやすやと眠る莉音を見て愕然とする。ただ今、7時40分・・・。

・・・このままでは遅刻決定になる。雪女は、時刻を見てあたふたする。

「！そうだ、雪女！莉音を起こすの手伝って！！」

「はい！お役にたてるのであれば何でも！！」

まず、莉音の制服を床に置き、雪女を莉音が被っている毛布に触れさせる・・・。

何が起こるかは、雪女本人が一番よく分かっているために躊躇する。

「わっ、若！！こんなことをしては、莉音様が・・・」

「仕方ないよ。僕が責任取るから！」

「・・・では」

雪女がそつと毛布に触れた途端、一気に毛布が凍りついた。

その瞬間、莉音の悲鳴が屋敷に響く・・・。屋敷の妖怪達は一瞬肩を震わせたが、何が起こったのかだいたい予想がついてるため、何事もなかったように過ごす。学校にはぎりぎり遅刻せずに間に合ったが、

リクオは授業中、（もちろん同じクラス）ずっと莉音の殺気を背中にうけていた。

「リクオ、今朝のあれは何？」

昼休みに、莉音は後ろからリクオの肩に手を置く。振り向いたリクオは、何が原因で怒らせてるのか分かってるので、恐怖で顔を強張らせている。

「！！・・・えっと、ごめんね。遅刻しそうだったから・・・」

「・・・ふん。今度やったら許さないからな」

「・・・あはは」

一応、自分が悪いのは自覚してるらしい。顰め面でそつぱを向く莉音にリクオは苦笑し、一緒に弁当を食べようと言って屋上に向かう途中、清継に声を掛けられた。

「おい、奴良君、莉音君！」

「何？清継」

「君達にも話があるんだ。家永君達も屋上で待っているよ」

清継に連れられて屋上に行くと、唐突にこう言われた。

「ところで君達、今夜は大丈夫だろうね？」

彼と一番仲の良い、背の低い男子、島が楽しそうに言う。

「もちろんだよ、きよつぐ君。奴良も行くだろう？」

「うん」

一緒に弁当を食べている鳥居と巻も、興味深そうに問う。

「何？何の話？」

「今夜、旧校舎の探検を決行する！妖怪を見つけるんだ！」

「ええー?!」

「本当に？」

・・・

鳥居と巻は表情を強張らせる。彼女たちの気持ちもよく分かる。四年前の事故を覚えてるかは不明だが、肝試しじゃあるまいし、女子としては、そんなことのために怖い物や気持ち悪い物を見たくはないだろう。

清継が意気揚々と云った途端、莉音は表情を崩し、隣にいるリクオに耳打ちをする。

「ねえ、大丈夫なの？」

質問の意図を察し、リクオも小声で答える。

「うん。莉音を起こす前に、皆には旧校舎に来ないように注意していたから」

「・・・あたしは初耳だったんだけど、それならいいや」

「どうかしたのかい？君達」

「いえ、別に」

・
・

清継に訝しげな表情をされたが、莉音は何事もないように返事をする。

度胸があるというか、この動じなさが羨ましいとリクオは思った。

対して、家長カナは呆れたように言った。

「好きだよねえ、清継君。妖怪の話。って言うか、貴方ね。旧校舎の噂の発信者は」

「噂じゃない！四年前、僕はこの目で見たんだから！妖怪は間違いなくいるって！」

（妖怪かあ。・・・目の前にあたし達がいるんだけどねえ。まあ、清継が一番合いたいのは夜リクオだろうけど）

そう思いながら、リクオをちらりと見る。当の本人は、彼らの会話を聞いて冷や汗を流して黙っている。

莉音は苦笑して、心の中でリクオに言う。

（リクオ、堂々としてなよ。陰陽師でないかぎり、あたしらが妖怪だなんてばれっこないさ）

リクオは一瞬驚いた顔をしたが、目で有り難うと伝えた。これが莉音の妖怪の能力だ。

彼女は昔から、このように心の中で会話をすることが出来る。特に、人に聞かれてはまずいことはこつやって話をしていた。

「嘘でしょ？妖怪なんて・・・」

信じてない巻達に、清継は、どこか自信ありげに言う。

「つまり、君たちは怖いんだね？妖怪が」

一番妖怪を怖がっていたはずの家長が平然と言う。

「別に。怖いも何も、妖怪のことなんてよく分からないし。ね、リク才君」

話を振られるとは思ってなかったようで、どきまぎしながらも返事をする。

「！うん」

「では君達も参加してくれたまえ。妖怪のことを知るチャンスだからね」

「・・・でも、女の子は危ないんじゃない」

リク才は家長を庇う・・・とうよりは来てほしくなくて言ったのだと思っ
て、「あたしも女の子なんだけど」と言う文句は伏せておいたのだが、彼女の返答は意外なものだった。

「あたし、行ってもいいわよ。どうせ妖怪なんていないんだし」

「え・・・」

「ふふ。そして今宵、君は知ることになる。妖怪の存在を！」

家長は清継の話を全く気にしておらず、呑気に弁当を食べている。

（うちの連中には、旧校舎に近づくなって今朝、ちゃんと置いていたし・・・）

リクオは不安そうな顔をしながらも、横目で家長を見ながら自分に言い聞かせていた。

そして夜、駄々をこねる小妖怪に囲まれながら、雪女は鏡の前で髪型を整えていた。

妖怪といえども女の子。そういうところは人間と変わらないのだ。

「遊ぼうよー」

「ねえ、遊ぼうー」

「駄目ー。今夜はちょっと忙しくてね。・・・よしと、行ってきまーす！」

雪女が屋敷から出て言った後で、つまらないと文句を言う小妖怪に、側を通りかかった首なしが注意する。

「おい。お前ら、仕事しろ！庭掃除、夜のうちにすませておけよ」

「はい」

一方、リクオと莉音は私服に着替え、祖父のぬらりひょんに声を掛ける。

「じゃあ、おじいちゃん。ちょっと友達と出掛けて・・・」

「待つんじゃない。リクオ」

ぬらりひょんは、食事中に一端箸を止めてリクオを呼ぶ。

「何？おじいちゃん。僕、急いでるんだけど」

リクオは振り返り、訝しげに問う。ぬらりひょんの代わりに莉音が言った。

「三代目のことですよ？」

「そうじゃ。リクオ、三代目を継ぐ気にはならんか？」

「またその話？何度聞かれても、僕の考えは変わらないって」

「じゃが、お前の身体には、この儂の血が四分の一も流れておるのじゃぞ？」

「そうだとしても、僕は人間として生きるの！ずっと昔に、そう決めたんだ！じゃあね！」

リクオはそれだけ言うと、急いで屋敷から出て行った。気付いた母の若菜が声を掛ける。

「あら、お出掛け？気を付けるのよー」

「はい」

莉音は、ぬらりひょんと部屋で二人きりになった。

「・・・だってさ。でも、リクオは妖怪になると性格が変わるから、夜のリクオは継ぐ気でいるかも知れないよ？」

「・・・だいいがのう。莉音、酒を頼む」

莉音は、良く飲むねと苦笑して、お猪口に酒を注ぐ。

「はいよ」

リクオ達は懐中電灯を持ち、旧校舎の前に集まった。旧校舎はボロボロで物々しい雰囲気放っており、本当に妖怪が出てきそうだ。ちなみに、鳥居と巻と莉音は断ったために来ていない。

「不気味っすね・・・」

清継の後ろにいる島が呟く。リクオは、後ろにいる家長に声を掛ける。

「怖くなったら、すぐに言ってね」

「うん。でも、大丈夫。妖怪なんかいるわけないもんね」

「もちろん！」

リクオは笑いながらも、建物に嫌な感じを受けていた。

（何だろう、この感覚。・・・でも、大丈夫。あれだけ言っておいたし）

島は来たものの、怯えたように声を出す。

「本当に入りますか？清継君・・・」

「ふふふ・・・。いかにも妖怪がいそうじゃないか！」

清継は不気味に笑い、扉を開ける。中は電気が付けられてない為に余計に薄暗く、中も床が剥がれていたりとボロボロになっていた。

「どうしよう・・・。やっぱり、怖くなってきた・・・」

「安心して、カナちゃん。今夜は妖怪が出ないから」

「今夜は？」

うつかり漏らした言葉に、家長は首を傾げる。

「！・・・あー、いや、とにかく！何かあったら絶対僕が守るから！」

「本当に？」

「うわああああー！！！」

2 (後編)

島が叫び声を上げ、しりもちをつく。

視線の先には、人の彫刻と、壁に飾られた絵があった。

「絵だよ、絵」

リクオが言うと、驚いていた清継と家長も安心して妖怪探索を進めたが、先に進むにつれて奴良組ではない妖怪がゾロゾロと出現し、リクオは皆にばれないように、怪しまれつつも必死に隠していた。しかし、最後に見る調理室でリクオは協力的な妖気を感じ、止める間もなく、大きな緑の妖怪がこちらに向かって走ってきた。島達は慌てて逃げ出したが、家長が転んで、目の前で妖怪を見るなり気絶をする。

「カナちゃん！」

家長の側に行き、攻撃をされる寸前の所で、青田坊がガラスごと廊下突っ込んで妖怪に体当たりした。飛び散ったガラスは、雪女が白い着物の袖でリクオを守る。

「ふう。青田坊ったら、派手なんだから」

「雪女！」

「でも、ギリギリセーフみたいだったよ」

いつの間にか、雪女の隣には莉音もいる。

「莉音も。どうして此処に？」

「リクオが心配で、雪ちゃん達と見に来たんだよ。清継の情報だからまさかとは思ってたけど、本当にいるとはねえ・・・」

莉音は、学校の噂は清継のデマだと思っていたらしい。・・・と言うより、彼女は小学校から清継を嫌っていたため、妖怪以外の話でも真剣に聞いた姿など見たことないがない。

それでも彼と一緒にいるのは、（巻き込まれないか）リクオが心配だからだとのこと。

「リクオ様、ご安心を。私がお守りいたします」

「若に手を出すんじゃない。俺たちが相手だ！」

青田坊はそう言うのにやりと笑った。

その頃、ぬらりひょんは屋敷の妖怪を集めて総会を開いていた。一つ目がしびれを切らしたように言う。

「総大将、二代目が死んでもう何年経つとお思いです？いつまで、隠居された総大将が代理をお勤めになるのやら」

「そのことなら、前々から言っておるように、奴良組七十二団体後世妖怪一万匹を率いる三代目は、儂の孫、リクオをおいて他にない」

ぬらりひょんが言った途端、妖怪達はざわついて口々に言う。

「ですが、リクオ様はまだ幼い子供です」

「それに、聞くとところに寄れば、リクオ様にはその気がないと・・・」

「総大将、それは真でございますか？」

ぬらりひょんが変わって、一つ目が口を開く。

「妖怪に覚醒したのも、四年前に一度きりと聞いておる」

再びざわつく妖怪達に、一人襖に寄りかかった牛鬼が言った。

「皆の言うことはもつともだ」

妖怪達は一斉に、牛鬼に視線を集める。

「されど、畏れとは、鬼が鞭を打つと書く。それすなわち、闇の世界の主なり。待つのだ。リクオ様がその手に鞭を握り、真の畏れをまとう日を」

牛鬼の言葉に、着に喰わぬ表情の一つ目以外は納得したのか、妖怪達は静かになる。

一方、リクオ達は反撃に出ていた。

「凍えておしまい！」

雪女は青田坊の前に出て、妖怪に向かって口から冷気を浴びせる。悲鳴とともに凍りつき、今度は青田坊が妖怪を殴って外に吹っ飛ばした。

「なんか、あたしのやることなかったねえー」

少し残念そうな莉音に、雪女は笑みを浮かべる。

「怪我がなくて良かったじゃありませんか。さあ、一刻も早く、こんなところ出ましょう」

リク才達は学校の裏まで移動した。幸いにも、家長はまだ気絶している。

「家でも、表でも、学校でも。夜リク才様にお目覚めになったあの日以来、いつも若のお側でお守り続けてました」

「ずっと?」

「はい。この姿、見覚えありませんか?」

雪女と青田坊は、浮世絵中の制服を着た人間の姿に化けた。

「!...一組の及川さんに、倉田君?」

莉音は、特に驚く様子もなく笑みを浮かべている。

「雪ちゃん、やっぱり制服姿似合うねえ」

「・・・あ、そうか。だから雪女・・・及川さんと一緒にいたんだ」

莉音は、昼休みによく及川（雪女）と一緒にだった。それも、休み時間の度に互いに会っていた。

リクオはただ仲が良かっただけだと思っていたが、彼女は分かっていたからこそ、行動も共にしてたようだ。

「若。貴方様には、やっぱり三代目を継いでいただかないと」

「いつまでもお待ちしています」

雪女と青田坊の決意は固いようで、真剣な顔で言った。

「四年前のあの日の夜、再びリクオ様が、私達妖怪の、百鬼夜行の頂点に立たれる日を」

リクオは顔を伏せ、申し訳なさそうに言う。

「言っただろ、僕はその日のことを覚えていないんだ。僕は人間なんだ！」

「若・・・」

「人間として生きるって、決めたんだ」

その時、リクオに抱えられた家長がゆっくりと瞼を開け、完全に目を覚ます寸前に、雪女と青田坊が慌てて消える。

「！・・・カナちゃん」

「！！・・・妖怪が、化け物が——っ・・・！」

カナは頬を染め、リクオから飛び上がるように離れた。

「大丈夫だよ、カナちゃん。妖怪なんていなかったから」

「え？・・・本当に？」

「動物の模型を見間違えたただだよ。誰かが持ち込んだみたい」

莉音のごまかしに、家長はほっとした様子だ。昔から嘘が上手いので、彼女にとってこういう役回りは得意なのである。

「・・・そう。良かったー」

リクオが家長も連れて、家に帰ると、門の横にずらりと黒いスーツを着た人（おそらく妖怪）が並んでいた。

「ただいまー」

「若。おかえりなさいませ！」

リクオに、スーツを着た男たちが頭を下げる。家長はただ驚いて、「凄い」と呟いていた。

莉音がぬらりひょんに拾われ、リクオと暮らし始めている頃からこうだったので自分はもう慣れているが、初めて見たときはさすがに驚いた。

「行こう、カナちゃん。早く宿題やらないと」

リクオ達が家に入った後、男たちの後ろに隠れていた雪女と青田坊が頭をのぞかせた。

「俺がもう少し飛び込むのを遅らせたら、若の覚醒、見られたかも知れんな・・・」

青田坊の言葉に、雪女は黙って頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0811v/>

二人の孫

2011年10月9日04時47分発行